

発行所  
新左翼社  
大阪市大淀区本庄川崎町  
2-10 トミヤビル  
電話(371) 5304  
振替口座 大阪 88555  
昭和43年12月12日  
第三種郵便物認可

1969年  
1月25日  
第18号

月3回 5、15、25日発行  
1部 15円  
1カ月50円 半年300円  
1カ年600円 年共

# 新左翼

## 記事紹介

- 二・三画  
ダブルを批判す  
レオ・ヒューバーマン、P・M・スライジー  
マンズリー  
ビニュー誌より

- 四面  
二・四沖繩ゼネストに連帯を東大全共闘に連帯の集会岩井勇次同志の死を悼む



# 画期的な左翼諸党派の結集

## 全国労働運動左翼活動者会議開く

### 共同コミュニケ二ヶ

一、一九六九年一月下旬、電通労働、長船社研のよびかけによって、北は東北から南は九州に至る合計二十九組織、代表四十四名が結集し「全国労働運動左翼活動者会議」を開催した。

一、会議は、①現代労働組合運動の評価について②今日の階級情勢における反戦青年委員会、進めることを確認した。

七〇年闘争に向けての任務について、友一、会議は、折からの日大、東大闘争に関し、国家権力とこれと結託した日本共産党の反革命暴力を断固として糾弾することとを

一九六九年一月 全国労働運動左翼活動者会議

さしたた、反戦青年委員会に対する資本と既成指導部の抑圧と攻撃を、はねかえりてゆくことを共同の任務とする。ともに、今後さらに引き続き討議を継続し、七〇年に向けて共同の闘いをおし、

に、全学共闘会議の闘いを支持し、一五東大闘争労働委員会に激励と連帯のメッセージを送ることを確認した。

一、会議は、今後の討議と共同行動を保障するために、未参加の諸組織に対するよびかけを含めてその一切の準備を、電通労働ならびに長船社研に一任することを確認して

### 視点

現在進行している「新左翼諸党派の分裂と内闘」は、必ずしも用組合内の組合員を反戦をたえず労働者、学生、市民、市民運動家をさかしてこたえたことも、一、五年間の闘争を振り返り、各種の政治グループに対しても、支配階級、労働者活動家集団がたえず生み出した内闘をめぐって、それらに一致して、たえながるべきである。

「新左翼」は、機動的な闘争を、もたらす能力を、もつた。それは、資本主義の対立構造の根拠を、もつた。それは、労働者、学生、市民、市民運動家をさかしてこたえたことも、一、五年間の闘争を振り返り、各種の政治グループに対しても、支配階級、労働者活動家集団がたえず生み出した内闘をめぐって、それらに一致して、たえながるべきである。

一九九日、豊中市大宮公園 革命的前衛建設の事業は大々的な進捗をみている。この内容は、労働組合の組織と、労働運動の発展に重要な役割を果している。既成の左翼諸党派の二つの極に収束しつつある。

一九六九年一月 全学共闘会議の闘いを支持し、一五東大闘争労働委員会に激励と連帯のメッセージを送ることを確認した。

## 「新左翼」購読申込みと読者紹介を

下の欄に住所氏名をかいて、新左翼社までお送り下さい。送金には振替を御利用下さい。

氏名	住 所

送り先 大阪市大淀区本庄川崎町 2-10 トミヤビル 新左翼社

### 「新左翼」発展にご協力を！

読者のみなさん、  
協賛員のみなさん、  
「新左翼」はみなさんの支持と援助により発展してきました。

人民に対する襲撃よりの抑圧を露骨に口にしてきたアメリカには、メキシコ、日本には佐藤が三たび政権の座につき、七〇年安保の闘いは、経済危機の深刻化と重なって、熾烈な闘いとして展開されるのであります。このきびしい加え、情勢のなかにあって「新左翼」は、反戦・反安保勢力の巨大な流れをつくりだすために、今後、奮闘し前進して行く覚悟です。

皆さんの協力をより、各地に支部と通信員を配置することとができましたが、これを全国各地に拡大していき、紙面をさらに戦線的でいきいきしたものにしていきたいと希望しております。

「新左翼」発展のために、皆様、読者の紹介、投稿、紙代納入と資金カンパにご協力下さいませ、お待ちしております。

新 左 翼 社  
新左翼協力委員会

# 『革命の中の革命』

## —その長所と弱点—

レリス・ドブレの『革命の中の革命』の持つ意義を完全に理解するためには、古い革命家の記憶の中では淡々としており、若い革命家は経験したことがなく、また多分読んだこともないような、幾つかの事実を想起しなければならない。

二つの世界戦争に挟まれた時期の国際革命運動は、ロシア革命と、その革命の中から現れたソビエト国家と支配されていた。世界最大の国家における成功は、レーニンとボルシェビキ党に、先例も比類もないような威信と権威を付与したのである。革命的な社会主義者の存在するところでは、どこでも彼らは同一の構造を持つ政党を組織し、ロシアの同志たちの歩んだ道をも歩もうとした。そのために、彼らは相対的に共産主義者インターナショナル、即ち第三インターナショナル(コミンテルン)を創設した。そしてそれは、それに参与するものに命令を渡し、強制する力を持った、一種の世界革命の本部と考えられた。成立当初より、その存続の全期間を通じて(一九一九年から一九四三年まで)コミンテルンは、事実上ソビエト連邦共産党の支配するところとなり、かくしてロシア共産党は、世界共産主義運動の至高の政治的ならびに理論的権威となった。インターナショナルに認められなければ、いかなる党も共産党とは考えられなかったし、いかなる個人も、彼あるいは彼女がそのような党に属し

ていなければ、共産主義者とは考えられなかった。この制度上及びイデオロギー上の枠は非常に強力であったので、革命家とその圏外にあって働くことは実際上不可能であった。しかも、あえてそれを試みた者の中でも、最も重要な集団であるトロツキストたちでさえその党組織を極めて微細な点まで模倣することによって、コミンテルンに敬意を表したのである。

### 国際共産主義の多極化とふるさ

ソビエト連邦と西欧帝国主義列強との戦時同盟という緊急の必要に迫られて、スターリンは一九四三年にコミンテルンを解消した。しかし、この時までには、それが体現した思想と行動の型は、あまりにも深く根づいていたので、単なる組織上の変化によって、大した影響を受けなかった。モスクワは依然として共産主義運動のメッカとローマを兼ね、聖地巡拝の目的地であり、真理の源泉であった。きびしい正統性が運動全体に行きわたっており、あらゆる党とあらゆる党員に中央から下ろされる党の路線への盲目的な忠誠が要求された。そして偏向が見抜かれた場合は、誤謬を告白するか、破門を受けるかするよりはかはなかった。

第二次世界大戦によって触発された世界的動乱の衝撃を受けて、こうした事態は変化しはじめた。一九四四年から一九五〇年にかけて、革命と社会主義的変革が相次いで起り、その結果、社会主義プロレタリアが約二億の人口を有する一國から、総人口十億以上にのぼる約十二カ國へと膨張したのであるが、これらの歴史的な変革が、つい最近までインターナショナルのメ

ンバーで、ソビエト連邦に忠誠を誓っていた諸國共産党の庇護の下に起ったのは事実であるにせよ、事態は表面に表われないところへ変化しつづけたのであ

の歳月を要したのであるが、それは一つには、一九六一年まではキューバの指導者が、自分たちのやったことが実は社会主義革命であったということに気付かなかつたからであり、また一つには、このことに気付いた時は、キューバ人がソビエト連邦といわば恋愛中であつたために、ついに受容された共産主義理論に對して、野暮な疑問を提起する気にならないうような時期であったからであった。形式論者は、当時のように主張したい気持ちに駆られさしたであらう。つまり公認の社会主義政党を、当時形成過程にあった、新しい支配的政党の中へ吸収することによって、キューバの指導部は、革命的な正統性を獲得しつづけたのだ。公認された共産党の指導によって、キューバを無事に社会主義陣営へ迎え入れることができれば、キューバ資本主義の打倒が、非共産主義者によって行なわれたという

### 「革命的な正統性」に挑戦したキューバー

「革命的な正統性」とも呼ぶべきものに関するこの教義に挑戦して、最初に成功したのはキューバであった。一九六〇年の春、すなわちフィデル・カストロと彼の同志たちが、権力を握って一年半とたたない時にわれわれはつぎのように書いた。

「キューバ政権乃至はキューバ革命の確かに共産主義的と思われる性格について、いろいろの攻撃や非難が行なわれているが、それらは総じて、キューバ革命に關する最も重要な歴史的諸事実の一つ、すなわちこれこそ真正の社会主義革命が非共産主義者によってなされた最初であり、未だかつてどこにも無かつたという事実を蔽い隠すのに役立っている。この驚くべき事実がいかなる意味を内包しているか、今はだれも完全に予言することはできない。しかし、それが社会思想の領域のみならず、革命的行動の領域においても、新たな展望を切り開くであろうことを、何人といえども疑う必要はないのである。」(「キューバ、ある革命の分析」一五四頁)

「フィデル・カストロはこういつているに過ぎない——前衛なしに革命はないこと、此の前衛は必ずしもマルクス・レーニン主義党とは限らないこと、革命を行なおうと欲する者は、此等の党から独立して、自からを前衛に組織する権利と義務があること。

## P・M・スイージー

# 批判する

アメリカの独立社会主義者であるレオ・ヒューマン(一九六八年十一月八日による死亡)とポール・M・スイージーが出している雑誌「マンズリー・レビュー」の一九六八年、七月、八月合併特集号は、六七年に引きつづき、全巻をドブレに捧げている。(六七年の特集号は、ドブレの「革命の中の革命」の英語訳を掲載している)ヒューマンとスイージーは、今回のドブレ特集号を「レリス・ドブレとラテン・アメリカ革命」と題し、「編集者の言葉」で、その意図を次のように書いている。

「今回は、彼の理論と思想に関する諸家の論文集である。これらの論文の筆者は、大抵ドブレに對して批判的であり、特にそのうちの幾人かは大いに批判的であるけれども、敵意を抱いたり、敬意と讃嘆を欠いたりする人はひとりもない。レリス・ドブレは全世界に知られた一連の事件

が起ることに、少しも関心を持っていないというところが、キューバ人にハッキリしてくると、キューバとソビエトの蜜月は直ぐに終りを告げた。そして、ソ連に對するこの幻滅と並行して、今なおモスクワから指令を受けているラテン・アメリカ諸國の公認共産党に對する幻滅が進行した。キューバの指導部と、正統派共産主義との間の裂け目は、一時は癒やされて行くかに見えたこともあったが、再び大きく口を開け初め、その後ずっと広がりを続けている。

この理論は、多くの点で本誌の執筆者から批判されており、しかも彼らの大多数はその特殊な経験や専門的な研究の故に、諸事実を処理して結論を引き出すドブレのやり方を評価するに十分な資格を具えている人々である。したがってわれわれがここでやりた

# ドブレを

レオ・ヒューバーマン

のために、目下アメリカ帝国主義のポリビヤ新植民地の牢獄で三十年の刑に服している。彼がそこにいるのは、その著作と行動によって、全ラテンアメリカの独裁者どもと、その北米の主人の支配をおびやかしたためである。われわれはここに彼の勇氣と模範をたたえ、その早期釈放への願いをこめて、彼に兄弟的な擁護を送るものであるが、同時にそれはまた、本論文集の全執筆者の意向を代弁するものであることを確信する。もちろんわれわれは本誌の一冊が、ドブレの手に渡るよう努力するであろう。そして彼が反論するために利用し得る、あるいは利用せんとする、如何なる紙面をも、喜んで彼に提供するのである。

ここに紹介するのは、この特集の巻頭に掲載されたヒューバーマン、スティーヴ共同執筆の「ドブレ、その長所と弱点」と題する論文の全訳である。訳者久保武(中見出しは当社編集部)

が示唆するように、単なる搾取と悲惨に過ぎなかったのだろうか。もしそうなら、人類の歴史始まってこのかた、たいしての社会は革命に対して成熟しては来ずである。それとも、経済的、社会的、政治的諸条件の特殊な組み合わせが存在したのだろうか。だとすれば、それは何か。またそれは、どんな点で、他のラテン・アメリカ諸国の現状と似ており、また似ていないのか。

②ドブレを革命に成熟させたものは何かという問題とは別に、われわれはドブレが現実的にキューバで何が起ったかを正確に把握していかどうかを問わねばならない。本誌所載の、キューバ人シモン・トレスとジュリオ・アロンソの論文は、キューバ革命の発展過程に対するドブレの解釈に多くの点で、異議となえている。一九五九年以前の詳細なキューバ革命史が無いために、ドブレもそれを嘆いているが、この問題に決定的な判断を下すことは困難である。しかし少くとも次のように結論することが当を得ていると思われる。

③ドブレの見解は慎重に扱う必要がある。④それは、今後の研究と分析によって実証されなければ、他国の革命家の準拠すべき方式とするには、根拠薄弱である。

⑤ドブレの著書は、ゲバラが成育可能なゲリラ根拠地をポリビアに建設しようとして失敗する以前に書かれたものである。したがって、彼がその経験を分析してないのを責めることが出来ないのは明らかである。しかし、一九六五年、ペルーでリス・デ・ラ・プエンテの指導の下に、ゲリラ根拠地を建設しようとして、同じく悲惨な結果を招いたペルーの革命的左翼運動(MIR)の試みについては、同様のことは言えない。ドブレはペルーの敗北に言及しているけれども、これを分析しようとはしていないのである。

## 根拠薄弱のドブレ

客観情勢の分析を欠く

①ラテン・アメリカ諸国、あるいはその中の相当数は、一九五〇年代にキューバがそうであったような意味で、革命に向けて成熟している。ドブレは成熟していると考え、それを支える証拠や論拠を示していない。しかし、明らかに、これは決定的に重要な問題である。もし成熟していないとすれば、今すぐに革命を行なうとするのは確実な敗北を自ら求めるようなものであり、むしろそれよりも、各国をその段階へ押し上げるのを助けるのが革命家の任務ではないのか。ここで必要なのは経済機構、階級間の関係と矛盾諸階級の意識水準、等々の具体的な社会情勢の、マルクス主義的観点に立つ、骨の折れる分析なのである。ドブレはこの点で何の寄与もしていないばかりでなく、その重要性に対する自覚をすら示していない。

②前項に関連する問題——何が一九五〇年代に、キューバを革命に向けて成熟させたのか。それはドブレ

## 政治的側面無視の路線一般化に弱点

⑥これは本誌の寄稿者の大多数が強調している点であるが、いったいドブレはどうして軍事を政治に優先させるといった、マルクス主義的見地からは初歩的とも言わなければならないことを知らないのであるか。(たとえ、エミリアノ・ザプタ、パンチョ・ビラ、アウグスト・セザール・サンディノのような人物の名はすでに心に浮かんでくるのだ)ドブレの側にマルクス主義や歴史に対する、そのような底抜けの無知があるとは考えられない。したがって、その説明は他に求めねばならないのであるが、それは、彼がはっきりそう書いているわけではなく、たぶん意識するしていないにもかかわらず、しかも彼の著書の根底に潜み全巻に滲透している一つの仮説の中に見いだすことが出来る。

その仮説とは、今日のラテン・アメリカには、革命を成功させるために必要なあらゆる政治的諸条件が、すでに社会生活の表皮のすぐ下に存在しているという仮説である。それ故に必要なことは、困難かつ忍耐強い政治活動によって、これらの諸条件を作り出すことではなく、それらをいわば自在に作用させることのできる表面へ引き出すことであり、ドブレの考えでは、ただ軍事行動(ゲリラ根拠地)のみがこの機能をはたすことができるのである。ゲリラは二つの方法で、それを必要な政治的理解を持つている青年をひきつけ、彼らを訓練された前衛に仕立て上げること、第二は、従来大衆に歯止めをかける唯一の力ではないにしても、主要な力であった恐怖心を消散せしめることである。この解釈に立つと、ドブレは軍事そのものを過大評価するという粗雑な誤りを犯しているのではなく、ただ与えられた一定の条件のもとでは、ある種の軍事行動が、政治活動の適切な形態であるといっているに過ぎ

ないものである。

⑦前項の提起する問題は明白である。すなわち革命の成功に対する前提条件が、表皮のすぐ下に存在しているとするドブレの見解が正しいとすれば、この事実の由ってきたところを明らかにするものは何かということである。これに対して、それはラテン・アメリカの社会経済発展によって、自然発生的に作り出されたと答えるなら、事実ドブレは伝統的なマルクス・レーニン主義と調和することが出来る。しかし、それはあくまで、一つの革命理論の断片であり、革命の全過程における一面のみ、そのまた一側面を取り扱っているに過ぎない見なければならぬ。それはゲリラの局面に先行する政治的側面を無視しており、しかもそうすることによって、ほとんど不可避的に、ゲリラの局面における政治と軍事の関係の性格を歪曲し、その複雑さを過少評価しているのである。

⑧最後に、なぜドブレがかくも一貫して、ラテン・アメリカ革命の政治的側面を無視あるいは軽視するのかが問題である。その理由の一半についてはすでに論評した。つまり彼は、革命の成功に対する政治的前提条件は、すでに存在していると考えるのである。しかし、たとえそうだとしても、政治活動を継続し、さらに一段と強化することの必要性は依然として存在するのである。革命政権の樹立後すら、そのような必要性が常に存在することは、キューバ革命をも含めたあらゆる革命の歴史が明らかに示すところである。にもかかわらず、ドブレは、ゲリラ根拠地の創設と最終的勝利獲得との間に、軍事闘争だけが(前掲例で述べたような意味で)政治活動の唯一の形態であるような一時期を想定しているように思われる。つまりドブレの理論は、新しい党がゲリラの中から発展して来るまでは、政治活動自体の担当者が占めるべき場所はないのだと言えようである。伝統的な共産党は、正当にも、革命の進展にとって不適当あるいはそれ以下として扱われている。そしてドブレは、この時期にあって革命の役割を演ずべき、その他のどんな組織をも考へることができないらしい。彼の理論によると、直接ゲリラ闘争に参加しない人びとは、ただゲリラの指示模範や、多分そのラジオ放送から、本来のそれに代わるべき政治的経験や政治教育を受けることができるだけである。これこそ、キューバで起こったような、また今後他のどこかで起こりつつある、真の革命的発展過程の縮図だと言っても、決して言い過ぎではない。

⑨以上の分析によって、ドブレ理論の最大の弱点は、その特定の個々の誤りや手抜きにあり、それはなく(それらも重要ではあるが)、全ラテン・アメリカ革命の準拠すべき一つの路線を規定しようとしてきたことにあると思われる。キューバの経験に対するドブレの分析が全面的に正しく、本質的には同様の過程を繰り返すことのできる国が他にないことを認めるとしても(もちろんわれわれは認めないが)、これを全大陸に対する規範として掲げることにはどんな意味があるだろうか。

⑩例えばブラジルについて考えてみるがよい。三百万平方哩以上の領土に、八千万以上の人口を擁し、莫大な天然資源とリオ・グランデ河以南の最も発達した工業地帯を持つこの国は、何と言ってもラテン・アメリカ全体の死命を制する国である。このような国の革命の進展が、キューバのそれと同様の経路をたどるだろうか、たどることができるとか信じている者が、はたしているだろうか。あるいはまた、それを強いてドブレ式の鋳型にはめこもうとする者が、大きな災厄を招くものにならないと信じている者がいるだろうか。

⑪幸いなことに、ブラジルの革命家は、そのような幻想を抱いていない。ブラジルの地下組織については、今までもあまり書かれていない。事実彼らは慎重に公表を避けて来ている。しかしブラジルで革命運動が進展しつつあることや、その指導権がますます職團的人民前衛党(AP)の手中に移りつつあることは、ブラジルの独裁政権やCIAにとっては、なんら秘密ではないのである。今年の二月、三月とわれわれはキューバにいてヨーロッパ経由で帰国したのであるが、この旅行中に運よくAPの代表に会い意見を交換することができた。その時われわれの知り得たことは、印象深くもあつたし、またわれわれの意を強くするに足るものでもあつた。APは伝統的なラテン・アメリカ共産党に対する評価については、ドブレと同意見であるがただ、ドブレのゲリラ理論については、ブラジルの事と問題に適切でないと考えている。このことは、APがブラジルにおけるゲリラ戦の役割を認めないことを意味するものではなく、むしろ全くその反対である。ただ軍事行動開始の決定は、そのような行動が、一定期間、相当高度な水準において維持されることが明白となる時に、初めて下されるであろうと言っているのである。

したがってタイミングの問題は、政治指導部に一任される。なぜなら、そのような決断は、ひとえに国内及び国際情勢の全般に対する正確な分析をまわって、初めて下されるべきものだからである。それまでは(五年あるいは十年にもなるかも知れないが)、APは、マルクス主義的展望に立つて、ブラジルの現実に対する集中的な研究を行なうと共に(従来ラテン・アメリカのどの政党や組織もやることがなかった)、秘密幹部や閣下に教育と訓練を施し、学生、労働者、農民の間に組織を拡げ、組織自体の力量を増進し、現政権とその北米帝国主義への追随に反対する大衆宣伝を強化する等々、本来政治的なる諸任務を自己の任務と考へる。APの綱領は率直に社会主義的であり、武装闘争が勝利への唯一の手段であることを認めている。しかし武装闘争が、ゲリラ戦に限定されるとは考えず、むしろ現体制に味方する国外からのほう大な干渉を伴った、全大陸規模に於ける人民戦争の発展を想定する。この全過程は、他のどこにも先例がなく、現在では予見もできないような、もろもろの側面と特質を含む、長期にわたる過程であることが予想される。

⑫このような見とおしの上で立つて、APは当然ロシア、中国、ベトナム等、他の大陸の革命や人民戦争から、最も多くものを学び取らねばならないと考えている。しかし、革命の手本はどこにも求めていないしとりわけドブレの「革命の中の革命」には求めていない。われわれがたいして間違っていないならば、ラテンアメリカの革命が進展するにつれて、おそらくブラジルのAPの道を行く国民運動は次第に数を増し、ドブレの提起したような、厳格な図式や見取り図に惹かれる革命家は、段々と少なくなっていくであろう。(完)

